

【研究主題】 義務教育学校の良さを生かした教育課程の工夫

【副 題】 ～地域に根ざした新教科「ふるさと黒島学」の実践を中心に～

1 はじめに

本校は、西海国立公園九十九島の中にある最大の有人島「黒島」にある学校である。佐世保市西部の相浦港からフェリーで50分、島民は約400人であるが、近年は少子高齢化が進んでおり、小中学生の児童生徒数は本年度15名である。昨年6月には、黒島の集落が「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」として世界文化遺産に登録され、益々観光客で賑わいを見せている。産業は漁業が中心で、子どもたちにとっては、島民の多くが顔を合わせたことがある方であり、地域行事や学校行事を中心に交流の機会は多くある。

昨年度から、義務教育学校として新たに開校し、新築の校舎で児童生徒が勉学に励んでいる。少人数での授業や島ならではの学校行事・地域行事の中で、他ではない経験をし、サポートを受けながら、“15の春”での夢の実現に向けて、子どもたちはいきいきと活動している。

2 研究の取組について

本校は、前述したように長崎県初の義務教育学校として新たに開校した学校である。義務教育学校の良さである9年間を見通した一貫性のある教育計画を作成するとともに、発達段階に応じた教育課程の工夫が必要となる。本校の全児童生徒数は15名と小規模な学校であり、島内に高校がないため、多くの生徒は本校を卒業するとともに親元を離れて生きていかなければならない。少人数であること、メンバーが固定されていることで、他者との交流が限られており、就職や進学先で他者とのかかわりにおいて困り感を感じたり、居場所がつかれなかったりする子どももいる。卒業とともにくる自立に向け、ふるさとを愛する心と自らの力で未来を切り開く子どもを育てる必要性を強く感じ、学校教育目標を定めるとともに、それを推進するため上記の研究主題を設定した。本年度より設置した本校独自の教科「ふるさと黒島学」では、「黒島だからできる」「黒島しかできない」感動体験を軸に、9年間の成長を見越した学習を進めている。その学びを通してたくさんの人たちとふれ合い、発信をしていくことで、ふるさとの良さを再発見し、ふるさとを愛し、誇りに思う心を育成できると考える。

3 研究の仮説

児童生徒の発達段階に応じて、9年間を見越した新教科「ふるさと黒島学」を設置・実践する中で、課題意識をもってふるさとに出会い直す活動を通して、ふるさとに誇りをもち、郷土及び社会の一員として、時代の変化に対応できる心身ともにたくましく、人間性豊かな児童生徒の育成が図れるであろう。

4 研究の内容

(1)【本校の学校教育目標】

9年間を通して育てる ふるさとを愛し、
未来を切り開く 黒島っ子の育成

(2)【新教科「ふるさと黒島学」の立ち上げ】

義務教育学校の良さをいかした教育課程の工夫に新教科の設置が容易になることがあげられる。そこで、学校教育目標の具現化のため、離島にある唯一の学校であるということも考慮し、ふるさと教育を充実させるため、新教科を立ち上げた。

まず、9年間を見通した新教科「ふるさと黒島学」のカリキュラムの作成を行った。時数については、総合的な学習や生活科、特別活動を中心に、通常の教育課程と比べて次のように取り扱っている。

区 分	各教科	総合的な学習の時間	特別活動	ふるさと黒島学	総授業時数
	生活				
第1学年	44(-58)		26(-8)	66(+66)	850
第2学年	47(-58)		27(-8)	66(+66)	910
第3学年		0(-70)	27(-8)	78(+78)	970
第4学年		0(-70)	27(-8)	78(+78)	1005
第5学年		0(-70)	25(-10)	80(+80)	1005
第6学年		0(-70)	25(-10)	80(+80)	1005
第7学年		0(-50)	20(-15)	65(+65)	1015
第8学年		0(-70)	20(-15)	85(+85)	1015
第9学年		0(-70)	20(-15)	85(+85)	1015
合 計	91(-116)	0(-470)	217(-97)	683(+683)	8790

※各教科等の授業時数(標準的な時数から変更のある教科のみ掲載)

現在作成しているカリキュラムは、以下の通りである。

- ・学年・分野別のカリキュラム(図1)
- ・年間時系列のカリキュラム(指導計画)(図2)
- ・クロスカリキュラム(現在作成中)



(図1)



(図2)

※(PDFにリンク。以下同じ)

(3)ふるさと黒島学の特色ある活動

①「黒島だからできる」活動～黒島の魅力を知ろう～

郷土の伝統や産業、特性を生かしたカリキュラムとして、黒島豆腐、かんころ餅づくり、漁業体験、シーカヤック体験などを行っている。作り方を教えてもらったり、船を出してもらったり、地域の方の協力を得ながら黒島の魅力を学んでいる。

ア〔黒島豆腐作り〕

黒島豆腐は、にがりの代わりに、黒島の海水を入れて作り、普通の豆腐より塩味と重みのある、地元ならではの豆腐である。学校農園に大豆の苗を植えて自分たちで育て、収穫する。収穫した大豆を使って、保護者と一緒に黒島豆腐を作る。黒島豆腐作り際には、地域の方をゲストティーチャーとして招き、指導してもらっている。黒島豆腐ができた後は、一緒に食べる。

一連の学びで、地域の食への関心を高めたり、地域の方へ感謝したり、黒島の食の魅力を感じることができた。



イ〔かんころ作り・餅つき〕

学校農園にサツマイモの苗を植え、自分たちで育て、収穫する。収穫したサツマイモを使って、伝統的な方法でかんころ作りを行う。芋苗植えとかんころ作りの際には、地域の方をゲストティーチャーとして招いている。かんころができた後は、保護者・地域の方とともにかんころ餅作りを体



験する。餅つき際には保護者全家庭と地域の方も参加してもらっている。一連の学びの中で、地域の食への関心を高めたり、地域や保護者の方へ感謝したり、黒島の食の魅力を感じることができた。

験する。餅つき際には保護者全家庭と地域の方も参加してもらっている。一連の学びの中で、地域の食への関心を高めたり、地域や保護者の方へ感謝したり、黒島の食の魅力を感じることができた。

ウ〔漁業体験〕

3～6年生が、漁業体験を行う。保護者が漁師であったり、日頃から釣りをしたりしている子どももいるが、改めて島の主産業である漁業について調べると共に、仕事のやり甲斐や苦労などの話を伺った。実際に漁船に乗り、釣り体験を行う。この学びで、島の主産業である漁師の仕事を身近に感じるとともに、漁業への理解を深めることができた。



エ〔シーカヤック体験学習〕



ゲストティーチャーを招き、様々なシーカヤックのスキル、転覆したときのレスキュー法等を学んだ。前期課程・後期課程児童生徒がペアとなってシーカヤック体験を行った。この学びで、黒島を海から眺めることで、圧倒的な島の自然の素晴らしさを感じたり、海洋レジャーの可能性を学ぶことができた。

程・後期課程児童生徒がペアとなってシーカヤック体験を行った。この学びで、黒島を海から眺めることで、圧倒的な島の自然の素晴らしさを感じたり、海洋レジャーの可能性を学ぶことができた。

②「黒島について知る、考える、発信する」活動～黒島の魅力を発信しよう～

郷土の現状を把握し、自分にできることを見つけるカリキュラムとして、町探検、昔あそび、福祉学習、職場見学、職場体験(島内)、世界遺産の学習、観光客の方へのガイド体験、パンフレット作成、黒島CM(PR動画)作成などを行っている。育友会、漁協、健全育成会、公民館などに協力を得ながら、黒島の魅力を発信している。

ア〔職場体験学習〕

職業に対する正しい理解と望ましい勤労観を育むことを目的として、生徒それぞれが、自分の将来を見据え、興味のある職業について調



べ学習を行う。その後、島内・市内の各事業所へ体験学習の受入依頼を行い、7年生は2日間、8年生は3日間の体験学習を実施し、学習発表会で、その成果を全員が発表した。一連の学びの中で職業に対する理解を深め、勤労観を育てる。

イ〔世界遺産の学習〕

職員研修として世界遺産の学びをどう授業に位置づけていくかを県庁世界遺産課の職員を招き、先進校（附属中）の事例を



もとに学んだ。今後、少しずつではあるが、ふるさと黒島学の1単元として位置づけていきたい。

ウ〔黒島フォトコンテスト・黒島検定〕

黒島の魅力を再発見するために、黒島フォトコンテストを実施したり、観光協会の方を招き、黒島検定に挑戦したりしている。これらの学びがまとめとしての黒島CMづくりにつながる。



エ〔まとめ：リーフレット・黒島CM〕

学習のまとめとして、黒島について調べたことを情報発信する学習を行っている。前期課程は学習した成果をリーフレットにして黒島ウェルカムハウス（観光案内所）等に置いていただい

ている。来島した方に見てもらい観光に一役かっている。また、後期課程は、現在黒島CMづくりに取り組んでいる。これも完成



したら、案内所等で上映してもらおう予定である。これらの学びを深くするために、地域の方を招いて、黒島の生活の今と昔の違いについての講話もしていただいた。講話では、生活環境の変化や生活様式の変化など、島内の写真などを交えながら、わかりやすく説明をいただき、自分が育ったふるさとを見直すよい機会となった。

①②の活動及びそのまとめについては、データを蓄積し、次のステップの学習に生かすことができるようにしている。このことによって、1～9年生までの連続した学びが可能となっている。

(4)〔「未来を切り開く」力をつけるために〕

本年度は、新教科「ふるさと黒島学」について、カリキュラムの実践とその見直しに力を入れている。

しかし、一方で学校教育目標のもう一つの柱「未来を切り開く」黒島っ子を育成するために、昨年度から継続して、出口を意識した9年間の学びの構築（学力向上）に力を入れている。

①9年間を見通した学習規律の作成

本校独自の学習規律「学習の『はまゆう』」を作成している。9学年を低・中・高学年に分け、併せて職員用も含めて4種類作成した。各教室に掲示し、意識して取り組ませている。また、定期的に自己評価を行い、自己分析によって成長を見つめることができるようにしている。

②積極的な乗り入れ授業

本校では、複式学級の授業において、その解消のために後期課程職員の前期課程への積極的な乗り入れを行っている。特に、6年生の主要教科（国・算・理・社・英語）を後期課程職員が授業を行い、5・6年級の実質的な複式解消と、後期教育課程へのなめらかな接続を図っている。併せて6～9年の4年間を見据えての学力向上を図り、出口の保障をしていく。



③家庭学習の推奨

家庭学習の指標「自主学習のすすめ」（図3）を作成し、発達段階別の家庭学習の進め方の資料とともに各家庭に配付している。家庭学習チェック表に学習時間と内容を書き込み、保護者にチェックをいただく。これにより、学校と家庭が連携し、学習に取り組む子どもの姿を支援している。また、定期的に自己評価「家庭学習力アンケート」（図4）を行い、自分の取組の状況を振り返ることで、自己分析に役立てている。



(図3)



(図4)

(5)その他

最後に、義務教育学校の良さを生かした取組として、部活動・児童生徒会の活動を紹介します。

①前期教育課程の部活動

5年生児童から週1回の部活動を導入している。(7～9年生は週5回)児童生徒数も少なく、塾や学童がない黒島では、放課後子ども教室と連携を図り、児童の放課後の居場所づくりも併せて推進している。(放課後子ども教室：週2回)



②児童生徒会を設立

児童会、生徒会を統合し、児童生徒会として学校全体で活動に取り組んでいる。前年度の12月に児童生徒会選挙を行い、会長は8年生から、副会長は6、7年生から選出する。1月に引き継ぎをする。

専門部の活動は5年生から参加、児童生徒総会を5月に実施し、総会は、1～3年生も見学する。これにより、児童生徒の中で、「一つの学校」という意識が育成できる。



5 成果と課題

(1)取組の成果

本年度、校内研修で中心に取り組んでいる新教科「ふるさと黒島学」、その名の通りふるさとである黒島を学ぶ教科である。実践では、ふるさとを教材にし、黒島ならではの取組を1年生から9年生にかけて段階的に行うことで、郷土の歴史や産業、文化に対する理解が深まっている。また、それぞれの取組において

地域の方々や保護者が関わることで、地域に根ざした協働的な学びが実現している。さらに、島内外での体験を重ね合わせることで、自分の将来について考え、生かすきっかけとなっている。

徹底的にふるさとを意識するその学びを通して、ふるさとを愛し、そこで生まれ育ったことを誇りに思う児童生徒を育成できる。

そして、学びを続け、課題意識をもって「ふるさと」に出会い直すことで、単にふるさとの良さを学ぶだけでなく、ふるさとを活性化するために自分たちに何ができるのか、ふるさとを離れる自分に何ができるのか等、この新教科の実践が積み重なることで、より深い学びができつつある。

一方、「15の春」を迎え、一旦ふるさとを離れる9年生の進路の幅を広げる取組、学力向上についても義務教育学校小規模校だからできる可能性を感じる。体制を上手く利用することで、複式解消による学力向上を図れるだけでなく、そこに勤務する教職員が児童生徒の9年間の育ちを間近で見ることができていることが大きい。特に6年生は、教科担任制が確立しつつあり、6～9年生の一貫した教育が実践されている。このことが、学力向上だけでなく、後期課程へのなめらかな接続(中1ギャップの解消)につながっている。

(2)取組の課題

まだ新教科として立ち上がったばかりであり、昨年度作成したカリキュラムを実践しているところである。実践しながら課題をまとめ、より良いものに修正していかなければならない。現在、学ぶもの(単元)が多すぎて、時間に余裕がないこと、成果でも触れたが、その活動がふるさとの良さを実感するものにとどまっている状況である。

1年～9年までが学ぶ義務教育学校であり、ふるさと教育が実践しやすい本校だからこそ、この新教科が立ち上がったのである。その意義を踏まえ、確実な実践、データを蓄積し、次のステップの学習に生かすこと、実践を重ねる中で、ふるさとの現状を知り、より課題意識をもって「ふるさと」に出会い直す活動に高める必要がある。

本校の職員は、積極的に小中文化の違いを理解し、昨年度から学校全体でつくってきた義務教育学校としての文化を新たに創ろうとしている。新教科がその一助になれば幸いである。